

## 博士論文（要約）

（論文題目）十六・十七世紀の備前焼茶道具の研究

（Title）Bizen ware Tea Utensils in 16th-17th centuries

人間総合科学研究科 博士後期課程 世界文化遺産学専攻

（学籍番号）201030581

下村奈穂子

SHIMOMURA, Nahoko

### はじめに

本論は、伝世資料、文献資料、出土資料を組み合わせ、16・17世紀の備前焼茶道具の編年をおこない、それによって茶の湯における備前焼の位置付けや、窯自体の有り方について解明することを目的とする。

岡山県備前市伊部周辺で生産されている備前焼は、古代からある須恵器の焼成方法を受け継いで生産された「焼き締め陶器」である。釉薬が施されていないため、器表は粗く、また色彩は基本的に茶褐色である。12世紀末期の開窯以降、幕末に至るまで備前焼の主力製品は壺、甕、挿鉢などの日常雑器であった。ところが、16世紀初期、美的価値が求められる「侘び茶」の道具として取り上げられるようになる。当時は、主に「唐物」と称される中国で生産されたものが茶道具として高く賞玩されていた。唐物の茶道具は艶やかな釉薬が施された陶磁器や、端正な姿をした金属製のものが大部分を占める。従って、無釉で素朴な備前焼は、唐物とは大きな隔たりがあったはずである。それにもかかわらず、備前焼は「侘び茶」の道具として国内産陶磁器のうち最も早くから取り上げられ、現在に至るまでその評価や格は極めて高い。備前焼茶道具を研究することによって、「侘び茶」における美的感覚の一端を明らかにすることができるに違いないと考えた。

さらに備前窯では、侘び茶の黎明期である16世紀から、茶道具全体の生産が下火になる17世紀末期まで、水指や建水、茶入、花入、茶碗、鉢、香合など様々な器種の茶道具が生産されていた。備前窯ほど、あらゆる器種を最初期から生産し、評価が高かった窯は存在しない。従って、これらを研究することによって、備前焼のみの展開が明らかにされるばかりではなく、それを指標として国内の他窯の製品に適用することも期待できるのである。

### 序章 研究の概要

本稿の研究範囲は、侘び茶において備前焼の使用が初めて確認できる16世紀初期から、茶道具生産が停滞期に入った17世紀末期までを対象とした。この200年間を茶の湯の指導者の活躍時期、及びその影響期間に基づき、暫定的にⅠ期（16世紀中期～後期）、Ⅱ期（16世紀末期～17世紀前期）、Ⅲ期（17世紀中期～後期）に区分した。また、器種は、16～17

世紀の茶会記に安定的に使用が認められ、名物として名物記に掲載された水指（釜や茶碗に注ぐ新しい水を蓄える容器）、茶入（粉末状の茶を入れる小形の容器）、花入（花を入れて飾る容器）、建水（茶碗をゆすいだ後の汚れた水や湯を捨てる容器）の四種を取り上げることとした。

本稿の核となる編年作業では、まず伝世品、茶会記、出土資料から備前焼茶道具の基礎情報を収集した。これらから得られた情報を基に、器種ごとに上記の三期の時代に分け、以下の手順によって全体像の構築を試みた。

- (1) 伝世品の年代観を確認する
- (2) 茶会記の記述を分類し、器形を明らかにする
- (3) 茶会記の記述と伝世品を照合する
- (4) 出土資料を分類し、器形を明らかにする
- (5) 出土資料と伝世品を照合する
- (6) 出土資料と茶会記の記述を照合する
- (7) 以上の作業によって得られた結果を統合させる

## 第一章 先行研究史

備前焼についての先行研究のうち、本研究の主題である茶道具とそれに関連する考古学的研究を中心に簡略に記した。

## 第二章 備前焼茶道具の誕生

侘び茶の道具として取り上げられるまでの備前焼の流通状況および評価と、取り上げられた背景について考察を加えた。12世紀末期から生産が始まった備前焼は、文献資料および出土状況から、15世紀以降、壺・甕・播鉢などが本格的に京都へ流入したことが明らかになる。そして、15世紀末期から16世紀初頭にかけて、新しく「侘び茶」が誕生した結果、天文年間(1532～55)には早くも備前焼が茶道具として使用されていたことが、『禅鳳雑談』および「珠光古市播磨法師宛一紙」から判明する。当時、使用されていた備前焼は水指および建水であると推測され、いずれも定番であった別の道具の比較材料として評価され、その価値や美が見出されていたと考えられた。

## 第三章 水指

備前焼水指は、国内産陶磁器のうち、信楽焼に次いで早くから使用が確認され、茶会記における登場回数も信楽焼の次に多い。備前焼は、信楽焼と共に16世紀を代表する国内産陶磁器の水指であったと考えられる。そのため、I期の水指には、信楽焼の鬼桶水指と同形の一重口桶形であった可能性が高い。さらに、天正期(1573-93)以降の備前窯では、南蛮物の写しなど、茶の湯のための特別な水指を生産し、新たな展開を遂げたことが指摘できる。

Ⅱ期には、新たに矢筈口筒形や変形一重口筒形、重ね餅形の水指が生産された。これらにみられる胴部の歪みや篋目などの装飾は、茶の湯の新しい趣向によるものと考えられる。

Ⅲ期になると、前段階から一転し、伊部手の技法によって作られた均整のとれた姿の水指があらわれた。伊部手の水指には、極めて多彩な形状があり、この時期の水指は自由な造形感覚で作られるようになったと考えられる。

#### 第四章 茶入

備前焼茶入は、国内産陶磁器のうちでは、瀬戸茶入に次いで早くから使用が確認される。唐物の使用が一般的であった茶入において、焼き締めである備前焼を使用することは特異な例であったと思われる。最初期の備前焼茶入については詳細を明らかにすることができないが、Ⅰ期後半にあたる天正期（1573 - 92）には唐物の肩衝形を模倣した茶入が生産されたと考えられる。この唐物写しの肩衝形は、Ⅱ期にあたる16世紀末期には、肩部が真っ直ぐ横に衝き、胴部がゆったりと膨らんだタイプの肩衝形を手本とするようになる。

またⅡ期には、新たに、唐物にはみられない和物独自の形状である筒形肩衝形もあらわれた。筒形肩衝形には、胴部に歪みや篋目の装飾が施されたものもあり、新しい茶の湯の趣向が加えられている。

肩衝以外の形の茶入が初めてあらわれるのは、Ⅲ期である。それらは、丸壺形などの唐物茶入を忠実に模倣した形と、口狭形などこれまでにはない新規の形の二つのグループに分けられる。いずれも伊部手で、茶入に必要な鑑賞ポイントが具えられた均整のとれた姿の茶入であった。

#### 第五章 花入

備前焼花入は、国内産陶磁器のうちでは、最も早くから茶の湯で使用され、茶会記における登場回数も最多であることから、人気があったことがわかる。唐物の胡銅や青磁の使用が常であった茶の湯の花入にとって、焼き締めである備前焼は特異な位置を占めていたと思われる。Ⅰ期の備前焼花入は、主に掛け花入として使用された筒形と角形、唐物の置き花入を模倣した瓶形の三種があった。なかには、名物として取り上げられるものもあり、高く評価されていた。

Ⅱ期には、筒形と瓶形の両者共に、歪みや篋目など唐物にはみられない様々な装飾が施されるようになる。これは、慶長期（1596-1615）の茶の湯の趣向から誕生した和物独自の大胆な装飾の花入であった。

Ⅲ期は、伊部手の技法を駆使し、唐物を忠実に模倣して、均整のとれた姿の花入を生産したと考えられる。

#### 第六章 建水

備前焼建水は国内産陶磁器の内では、最も早くから茶の湯で使用され、茶会記における

登場回数も圧倒的に多い。特に、永禄九年（1566）から天正十三年（1585）までの20年間は、茶会記に登場する全ての建水のうち、備前焼が最も頻繁に用いられていたことから、当時流行の建水であったと考えられる。Ⅰ期の備前焼建水には、棒の先形、甕の蓋形、面桶形、合子形の四種の典型的器形があった。なかには、名物として取り上げられるものもあり、高く評価されていた。ところが、天正14年（1586）以降は、面桶建水にとってかわられ、備前焼建水の流行は去ってしまった。

但し、Ⅱ期にあたる17世紀前期には京都の下白山町遺跡出土資料のように歪みや篋目の装飾が施された建水が生産され、またⅢ期にあたる17世紀中期以降には伊部手による均整のとれた姿の建水も生産された。生産・使用は減少したが、時代ごとに流行の造形のもものが作られ続けていたのである。

## 第七章 備前焼茶道具の評価史

名物記を中心に、16世紀から17世紀の備前焼の茶道具がどのように評価されてきたのかを考察した。その結果、16世紀は建水と花入、17世紀は水指が名物として取り上げられ、評価が高かったことが明らかになった。

## 終章 結論

時代別に茶道具全般を考察することで、新たに判明したことを記し、結論とした。その結果、備前焼茶道具は時代ごとに造形を変化させていることが明確になった。Ⅰ期には唐物写し、Ⅱ期には篋目や歪みが施された和物独自の新たな造形、Ⅲ期は伊部手へと展開していたのである。このような造形上の変化は、備前窯における生産体制の変化ではなく、茶の湯の指導者による趣向の移り変わりに起因したものと言える。備前窯は、それぞれの時代の流行に合わせて、ほぼ全ての器種を継続して生産していたことから、需要の変化に柔軟に対応し、新しい趣向に果敢に挑戦する革新的な産地であったと言える。

また、備前窯ではこの200年間、基本的には須恵器から続く「焼き締め」の技術を変えることはなかった。従って、革新性と共に、伝統性を持ち合わせた類まれな窯とみなすことができる。

文献資料から、備前焼茶道具の評価を判断するさいには、常に唐物や金属器などの定番道具と対比することによって、その価値が認められていたことが判明した。備前焼には唐物や金属器と比較しても、対抗できる強さや魅力が認められていたのである。茶の湯の趣向の移り変わりに柔軟に対応し、造形を変化させながらも、そのような強さや魅力を保ち続けた。それゆえに、侘び茶道具のなかでも、高い評価や格を獲得し続けたと言える。備前焼は決して唐物の代替品ではなく、それ自体が評価された茶道具であったと位置付けることができる。